

---

# BUMP OF CHICKEN メドレー～俺 彼女編～

タンポポ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

BUMP OF CHICKEN メドレー～俺 彼女編～

### 【Zコード】

N4028C

### 【作者名】

タンポポ

### 【あらすじ】

「天体観測」「宇宙の端っこはどうなっているんだろう?」そんな誰も発見できない事を天文学者になつた俺は探す事にした。「プラネタリウム」「星ばかりに気を取られ、彼女を構つてあげてない事に気付いた俺は、研究室でプラネタリウムの作り方の本を手に入れ。」「星のアルペジオ」「彼女と二人でクリスマスパーティー。しかし、彼女はいつになつても来なかつた。」「彼女と星の椅子」「彼女はスターになりたい歌手を夢見るフリーター。彼女はちゃんと（スター）になつたよ。」「Stage Of The Grounds」「俺は

天文学者を辞めていた。立ち直るためのきっかけをくれたのは…！  
？前作同様、歌詞がそのまま使われている時には『ーー』が入つて  
います。

——午前一時、踏み切りに望遠鏡を担いでつた。ベルトに結んだラジオ。雨は降らないらしい。

『やっぱ星はこの場所から見るに限るぜ』

家から少し離れた場所に、そのベストスポットはある。

誰にも邪魔されず、人通りも少ない道で、終電もなくなつたこの深夜に外を出歩こうとする人などいない。

さて、それではじっくりと眺めようとするかな。

この大宇宙に輝く星達を。

-----

俺は大学卒業後、天文学者になった。自分で言つのもなんだが、ちよつとしたエリートだ。

今年で三十を迎えた俺は仕事バリバリで生き甲斐すら感じている。

今は星の研究や宇宙の神秘について迫り、本なんかも編集している。

星に興味を持ち始めたのは小学生の時だ。

小さい頃から星が大好きで、流星群が来る時なんかはもちろんのこと、星が出ている日は夕焼けが落ちる前から一番星を探していた。

ガキの頃の夏休み、自由研究の宿題のテーマを星にしたのがきっかけだった。

一等星より五等星の方が光っているかもしれない。

本にそんな記事を発見してから食らいついたものだった。

確かに地球から見たら一等星が一番光っている。

ただ、それは一等星と地球の距離が近いだけの事であり、間じかで見て光を比べてみたら、一等星より五等星の方が光っている可能性もあるのだ。

高校では科学部の部長を努め、大学はトップクラスの成績で卒業。

その後いまの職場に就いた訳だ。

ただ、今は星より興味を持つた事がある。

『[宇宙の端っこ]まだじうつしているんだろ?』

考えただけで色々な想像が頭を過ぎる。

実は地球みたく、宇宙も丸くなつていて、さうに宇宙を越えるとまた何かがあるんぢやないか……？

それを越えようとしても、地球で言う所の大気圏みたいなバリアがあるのではないか……？

今の科学ではそれを証明できないがために、宇宙は無限などと言われている。

それを暴く仕事を今しているわけだが、どうにも分からない。

そんな気晴らしと言つては何だが、本職の星の動きの観測をしに、今日は来ている。

時刻はジャスト一時。この時間帯の星は良く見えるんだ。

そろそろアッシュが来るはずなんだが……。

——分後に君が来た。大袈裟な荷物しょつてきた。

「ゴメン、元基君！これ重くつてや」

『いや、大丈夫だよ結。さあ、——始めようか天体観測』

結は大学時代から俺の彼女であり、歌手を目指すフリーターだ。

時間が余つては、こうして天体観測に付き合つてくれる。

「流れ星、見れるかな？」

『ん～…運が良ければ…な』

それについてもコイツは何を見るつもりだ？

俺の望遠鏡は科学室から借りて来た専門の望遠鏡だと云ひつに、それより少し小さいサイズ。

それだつて一般人が持つ望遠鏡にしては大きすぎる。

こんな小柄な体格で良く持つてこれたもんだな。

「…」

『ん？ どうした？』

結は星を見ながら低い声で唸り、首を傾げていた。

「なんで星つて光つてるんだろう？」

……今更ですか？

別に星自体が光つてているわけではないのは、知っているだろう？

ちなみに、今見えている光だつて、何光年という時間が経つて地球から見えるだけであつて、実際はもう今見える星は存在しないかもしないのだ。

星はいずれ滅びるものだ。地球だって例外ではない。

星が滅びる…つまり破裂した時にブラックホールが発生する。

その名の通り、黒い穴の物体が現れ、周りの星を吸い込むと言つよ  
り、性質同士を引き寄せるのだ。

そして引き寄せられた星同士がぶつかり、ビックバンという大爆発  
が起こりつる。

太陽が徐々に大きくなりつつあるというのをご存知だらうか？

何億年後には、地球で人が住めないくらいの暑さになるらしい。

だから今、地球ではなく火星に住む研究をしている。

火星で氷を溶かし、湖を作る。そうすれば生物が誕生し、緑も育つ。

これなら火星に住む事ができるのだ。

ただ、これにはかなりの時間が掛かるがな。

その研究をしているのが俺の仕事。

この研究は実際に行われています

宇宙の神秘つてのに興味を持つてもらえたかい？

「あ、流れ星ー！」

『マジー！？』

「もう消えちやつた

くそ、語つてたら見逃した…。

「もつかり見る。ほつき星はこいつ見ても良いね

ほつき星とは、流れ星が通つた後に圧を弾く事で、輝いて見えるものだ。

車なんかでも、空氣を切るでしょ？ その切つた空氣が肉眼で確認できぬつて感じかな。

じゃあ、やひそろ俺も見るかな。

——見えないものを見よつとして、望遠鏡を覗き込んだ。

「何を見てるのー？」

『芋田の端っこ』

「…バカ？」

『「ひみせえ』

——気が付けばいつだつて、ひたすら何か探してゐる。

俺ひとつてば、やつする事で生を実感できるみつな『死』をしたから。

——生まれたら死ぬまで、ずっと探してゐる。

これからも、ずっと…。

「なんかせ、こんな暗い空見ると頭クラクラして来ない?」

『ずっと首あげてつからだ!』

「… 星マーク」

俺は結の言葉にも冷たく言い放つた。

せつかくの天体観測を邪魔されたくないからだ。

——見えてるのを見落として、望遠鏡を覗き込んだ。

「… 雨?」

『うわ、マジかよ!』

——予報外れの雨に打たれて泣き出しちつた、君の震える手を握れなかつた。

『… そんな泣くなよ。たかが雨じやん』

「泣いてないよバカ！一生星見てれば良いじゃん！じゃあね！」

そう言つてサッサと荷物をまとめると、結は帰つてしまつた。

：なんなんだアイツ。

何であんなに怒つてんだ？

次の日、——もう一度君に会おうとして、望遠鏡をまた担いで、前と同じ午前一時、踏み切りまで駆けてくる。

『——始めようか、天体観測』

——分後に君が来なくとも。

～プラネタリウム～

『……と言つわけだぞ、何で彼女が怒つたか分からんんだよ』

「ハツハツハツ、そりゃ彼女も怒るだろ」

『……なんで？』

「星ばっか見てないで構つてやれよ、ホラ!…」

次の日の研究ラボで、俺は同期の仕事仲間と、昨日の件について相談を聞いてもらっていた。

そして、コイツが渡してきたのは、一冊の本だった。

『『プラネタリウムの作り方…?』』

確かに昨日は結構構つてやれなかつたが、あれも仕事の内だ。

しかし、怒つて帰つてしまつた彼女を放置する程、俺はバカじやない。

『『プラネタリウムの作り方』』と書つ本と、そこに書いてあつた必要な材料を手に、結の住むアパートへ訪れた。

『『結へ!入るぞ!』』

「…何?」

『『どうやらまだ機嫌は直つていないみたいだ。』』

『『えつと…その…』』れ、一緒に作んないか?星…好きになるや?』

「うん、とりあえず入つて」

——科学の本に書いてあつた作り方の他にアレンジ。

俺の知識を使えばこんなの一瞬で作れるぜ。

「…さすがだね元基君」

『ほら、結。好きな形にココに穴を開けて』

すでに八割完成。

電球にスイッチを付け、その上に半球の紙を被せる。

後は、この紙に穴を開けるだけだが、これは結に任せようかな。

「フフ、できた」

『ふーん、夏の大三角か。季節外れだな。今は冬だぞ?』

「これがいいの!」

「元基君も何か開けてよ」

『俺か?よし、まかせな』

針を手に大きさ、形、バランスを考えながら、一個一個丁寧に穴を開けていく。

——実在しない穴を開けて、恥ずかしい名前つけた。

「…? これ、なんて星座?」

『便座』

「……恥ずかしいね」

すべった!?

その他にも、満遍なく穴を開け、完成、手作りプラネタリウム。

時間帯はすっかり夜なので、部屋の電気を消し、カーテンを閉める。

部屋の中は真っ暗だ。

『いいか? つけるぞ?』

「うん!」

力チツとスイッチを入れると、天井に広がるは壮大な銀世界。

「…きれい」

一人してベッドで仰向けに寝転がり、しばらく見つめていた。

『…結』

「ん?」

『昨日は、ダメな』

「別に。もう気にしてないよ」

『今から真面目な話をするから聞いてくれ。』

俺より結を優先するけど、結より仕事を優先する。

つて事は結より金なのか？  
つて言われてもそうじゃない。

もし結が死にかけて手術費が足りないとかなつたら、多額の借金  
ぐらう背負える覚悟はあるから。

結局一番大切なのは、やっぱり結だよ

「… ありがとう」

（星のアルペジオ）

季節は十一月。今日は恋人達が待ち侘びたクリスマスだ。

デートスポットへ行く恋人達や友達同士で集まってパーティーをやる人達。

過ごし方は様々であるが、恋人がいてこの日が嫌いと言う人はいな  
いであろう。

今日、俺の部屋に結が来てクリスマスパーティーを一人っきりでや  
る。

結の為に買った——プレゼント、何度も持つたり置いたり。

早く約束の時間になれと早まる気持ちが自分でも分かる。

——広げたジユースとお菓子、並べたぬいぐるみ達。飾る四畳半。

……完璧だ。文句の付けようがない。

しかし、約束の時間になつても、結は来なかつた。

——一人分のケーキの前で頬杖ついてうたた寝さ。

～ドンドン～

……來た！！

俺は勢いよく玄関に駆け付た。

結は窓を開けて俺を外へ手招きしている。

『……え？ ちよ……中でパーティーの準備したのに』

それでも結は無理矢理に俺を連れ出した。

でも、まるで夢のようだった。

-----

……え？ 夢…………？

そこでふと田が覚めた。部屋には結の姿がなかつた。

『——夢かい……』

ガックリと肩を落とした。

しかし、さつきまで夢見ていた事がそろそろ現実になるんだ。

『……そうだ。確か買つておいたあれを……ああ、あつたあつた。』

パーティーを盛つ上げようと思つて用意しておいた鼻メガネをとつだした。

それを付けてテンションをあげておひつと思つた。

きつと結は笑つてくれるだりつ。

ヽクスクスヽ

そう、そんな感じに…つて、え!?

今笑い声が聞こえたぞ。

部屋には俺しかいない…誰だ?

ヽクスクスヽ

笑つていたのはぬいぐるみ達だつた。…ような気がした。

フツ、ぬいぐるみの声が聞こえる程、俺の気は動転しているのか。

もう夜も遅くなつてきたと、いのにまだ結は来ない。

急に不安になつて電話をかけてみたが繋がらなかつた。

『――どうして電話も出ないんだ?』

――髪も染めたんだよ…?

急な仕事でも入つたのだろうか?

そこで留守番電話にメッセージを残す事にした。

ヽトゥルルル…ガチャヽ

『——もしもし、パーティーの準備できたよ。もつこつち向かってる？留守番聞いたら電話下さい』

それから結構な時間が経ったのに連絡は来なかつた。そこでもう一度電話をかけてみる。

（トウルルル…ガチャ）

『——もしもし、今こつち結構盛り上がつて來た…結構ね、まあ…まだ一人なんだけど…この留守番聞いたら電話ください。…じやあね』

（トウルルル…ガチャ）

『——もしもし、今もう大体飲み物…なんか俺一人で飲んじやつたから…なんかもし飲みたいのあつたら買つてきて。じやあね』

（トウルルル…ガチャ）

『——お~い…もしもし?え~と…何回か電話したんだけど…えつと、今日ね、大体何時でも時間大丈夫だから…うん、いつでも電話して下さい』

（トウルルル…ガチャ）

『——もしもしー早く来た方が良いよこれー俺が編み出した動き  
マジスゲヒこれ..超ウケ..面白い。』

：と、まあこんな感じの留守番電話を入れておいたが連絡は来なか  
つた。

しびれを切らした俺は——君へのプレゼント、自分で開けた。

——聖なる夜に尻を叩いて、自分でも驚く様なダンス。こんな動き  
は見た事ないぜ。踊る鼻眼鏡。

結...どうしちゃったんだよおー。

（彼女と星の椅子）

——テレビの前で彼女は一人。椅子に座つて煙草に火を点けた。

「フン、全く。やつてらんないわよ」

——テレビの中、歌うスターを見て、煙と共に皮肉を吐いてる。

「フー…私だって、このくらいの歌唱力は…」

——本当はスターになりたい君が、何もできず椅子に座ってる。

「煙草…ノドに悪いから…いや、もう関係ないか。所詮、私が歌手になるなんてバカげてたんだ…」

元基君との天体観測中。私はふと気付いてしまった。

仕事に熱心な彼が羨ましい。

仕事に生き甲斐を感じる彼みたいになりたい。

所詮、私は歌手を夢見るフリーター。

収入だつてたいしてならないし、歌手になるなんて程遠い。

私には…才能がない。

努力だけじゃ補えない。

そんなイライラから、元基君に当たってしまった。

しかし、彼は次の日には、私を元気付けようと、一緒にプラネタリウムを作ろうと言つのだ。

私は自分がいかに小さい人間かを悟つた。

——散々、人に当たつたつて、自分が惨めになるだけさ。……こんな損な事はないよ？

今日はクリスマスイブ。  
元基君と約束している。

だが、彼に会わす顔がない。

たくさんのお留守番電話。

その声は私の耳にも届いている。

ゴメンなさい、元基君。

私はあなたのようにはなれません。

歌手になれない私に

もはや魅力もなくなるでしょう。

「……サヨウナラ」

彼女はスターになつたよ。

夜空に輝く

本物の星に。

Stage of the surroundings

『ウウ…結』

「もう飲むのは辞めようよー体に悪いってー！」

『なんで…バカじゃねえのかアイツはー何死んでんだよー…』

「それは気の毒だと思つけどさ、だからってお前、科学者も辞めて毎日酒飲んでたらダメだって！」

「うむせえ、うむせえ。

お前らに俺の何が分かるって言つんだよ。

最愛の人を亡くし、それで俺だけ平凡な暮らしを送れって言つのか？

つい最近まで、ずっと隣に居たじゃねえかよ。

弱音なんか吐かない奴だから、何でも器用に熟す奴だったから、歌手にだつてなれるつて…。

だから俺だつて安心してたのに。

現実は、まるで逆。

弱音を吐かないから溜め込んで、それがプレッシャーとなり、自分を追い詰める。

…なんの為に俺がいるんだよ。

その弱音を聞くのが俺の役田じゃねえのかよ…。

結の死から半年、つねだれる様な暑さの中、俺は毎晩つから飲んでいた。

生きる希望を失い、途方に暮れる日々。

それでも、俺が科学者を辞め半年も経つた今でも、心配してくれる奴はいる。

なのに俺ときたら、そんな良い奴にも冷たい態度。

……最悪だよ、俺。

——飛ばしつとしたつて、羽なんかないつて、知つてしまつた夏の日。  
じゃあどうすれば良い！？

これから俺は何をすればいいつて言つんだよ。

「割り切れよ」

同期の仲間がそつ言つた。

『だつてよ……』

「じゃあいつまでもそこで止まつてるか？宇宙の神秘を説き明かす  
んじやないのか？いい加減、戻つてこいよ、みんな待つてるぞ」

『…………』

「お前、前にこんな事言つてたよな？『女は星の数だけいる。その  
中から、結を選んだ』って。人を選んだ奴つてゆうのは、誰かに必  
要とされているんだよ」

「頼む、俺達だけじゃ知識が足りない。協力してくれ

『…………』

『 じやあな

「おい！元基！……つたく」

俺は必要とされているのか。

結、俺はどうすれば良い？

満天の空に輝く無数の星。

そ、このどうかに結がいるんだよな。

今日は夏の大三角が、一段と輝いてるな。

プラネタリウムにアイツが開けた星座は、これだつたな。

——古い夢を一つ犠牲にして、大地に立つてゐつて気が付いた日。

俺はまだ、そっちには行けそうにねえや。

結はきつとーー夜空の応援席で見てる。

宇宙の謎、暴いてやがりやんか。

『気が付くと、ラボに駆け付ける俺がいた。

「元基…おかえり」

『ただいま

——360。全て道なんだ。

(後書き)

読んでいただき、ありがとうございます。なんか星の事とかで間違っている所もあると思うので、その時は連絡下さい。すぐに訂正いたします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4028c/>

BUMP OF CHICKEN メドレー～俺 彼女編～

2010年10月11日16時28分発行